

忽那敬三先生を送る

和 泉 ち え

忽那敬三先生の定年ご退職にあたり、哲学講座の教員一同を代表し、拙いながらも送る言葉を述べさせていただきますたく存じます。

忽那先生は1986年に千葉大学教養部ドイツ語教室に講師として赴任され、1994年の教養部廃止に伴い文学部ご所属となり、以後行動科学科哲学講座助教授・教授としてご専門の近現代ドイツ哲学を主軸に据えた研究活動を展開されると共に、普遍教育でのドイツ語教育や全学規模での技術倫理関連プロジェクト等々を含む幅広い領域において、千葉大学ご在職の32年間余にわたり多大な貢献を重ねられました。「20世紀初頭以降のドイツ語圏での哲学的な議論のなかで重要な役割を演じてきた諸思潮(新カント主義、現象学、実存主義、M. ハイデガー、N. ハルトマン、E. カッシーラー、フランクフルト学派)の問題設定や主導的テーゼをそれぞれ具体的に剔出すると同時に、それら相互の布置関係を検討することを通じて、哲学的な主張が現代世界に対しどのように寄与しうるのかを考察するという一般的な研究目標のもと、現在とはとりわけ科学的・技術的合理性要求の諸条件の哲学的解明に研究の重点を置いている」という忽那先生のパースペクティブ(文学部HP教員紹介参照)が如何に形成されたのか、その軌跡の断章を、忽那先生へのインタビューを通して学ぶことが許されました範囲において、以下手繰り寄せたく存じます。

忽那先生は東京大学理科一類に入学後、学部2年後半から所属された専攻課程は駒場の「ドイツの文化と社会」であり、大学院も駒場の科学史・科学哲学教室に進学されました。僭越ながらその経緯を伺いましたところ、理科一類の同級生のお一人に加藤信一氏(現、京都大学理科学研究科数学教室教授)という抜群に数学に秀でた方がおり、忽那先生が当初目指された数学研究は彼に任せるべきと思われたこと、また大学一年生の折、当時新左翼運

動の教祖的存在として各方面で活躍していた廣松渉先生の『世界の共同主観的存在構造』に衝撃を受け、廣松先生が教鞭を執ることになった「駒場」を志望されたという事の次第をご教示下さいました。忽那先生の哲学者としての根源（アルケー）には廣松渉先生が厳然と控えており、その系譜の広がり
と深さについて思いをあらたに巡らしました。手がかりとして、忽那敬三
（編・解説）『廣松渉コレクション』全6巻、情況出版1996年をはじめ、忽
那先生の以下のご高論を列挙いたしたく存じます。「自然科学における物象
化の問題：物象化論としての廣松科学論の位相」（『千葉大学人文社会科学研
究』32、1-13、2016）；「普遍主義の全体性論の隘路」（『情況』63-70、1993）；
「廣松哲学の原初的風景」（『情況』95-104、1994）；「廣松哲学にとっての科
学論の意味」（『情況』78-86、1995）；「精神的世界の存在構造」（『社会思想
史研究』76-92、1987）；「〈美的映現（aesthetischer Schein）〉の問題次元」
（『科学史・科学哲学』43-53、1986）；「階層理論の基礎的枠組」（『エピステー
マーⅡ』376-399、1985）；「他我論の問題構制と〈象徴形式の哲学〉」（『思想』
698号、213-238、1982）等々。また廣松門下生として忽那先生の人望は厚
く、定年ご退職に際して哲学講座が企画いたしました「忽那敬三先生を囲む
研究会」（今年度3月開催予定）には、東大の熊野純彦先生や東北大の直江
清隆先生（野家啓一先生はご体調のためやむを得ずご欠席）をはじめとする
蒼々たる同志の方々のご登壇になります。

さて駒場の科哲専攻博士課程3年を迎えた1982年6月、忽那先生はドイ
ツのゲーテ・インスティテュートでの語学研修のあとテュービンゲン大学に
留学の機会を得られました。テュービンゲン大学はヘーゲルの母校でもあ
り、忽那先生はH. G. ガダマーの最後の高弟として知られるリュディガー・
ブプナー教授の指導の下2年間研鑽を積まれ、千葉大学に着任されること
になりました。

忽那先生とドイツ アカデミズムとの交流は、さらに豊かに深化し続けます。
忽那先生は1996年より2年間可能であった海外研修期間を通して、バル
ト海に面したドイツ最古の大学の一つロストック大学を拠点に据え、充実
した研究活動を展開されました。忽那先生は、ロストック大学哲学科ハイ
ナー・ハステット教授との共同研究を継続されると共に、Deutsche

Gesellschaft für Philosophieの正会員としても精力的に活動し、3年に一度9月に開催される大会には上記1996年以来20年余欠かさずにご参加の旨と伺っております。その大会期間1週間にわたり繰り広げられるという濃密な哲学的議論の余韻は、千葉大学で接する折々の忽那先生の筋の通ったご発言やご示唆の節々に、実感として付随すると拝察申し上げます。夏期休暇中の哲学講座メール会議の際、ドイツ滞在中の忽那先生から届いたお返事(Thu, 13 Sep 2018)に添えられた「いまはドイツにいて、あまり長い日本語を書く気がないので(申し訳ありません)」という但し書きからも、ドイツにおける忽那先生の生き生きとした研究生活の一端が伺われると存じます。また忽那先生は、ロストック大学の共同研究者ハステット教授を度々(今年度も)日本に招聘されており、千葉大学においても教授を交えた講演会が開かれております。忽那先生の偉大な訳業の一つ、ハンス・ブルーメンベルク『近代の正統性』第二巻、法政大学出版局2001年も、ドイツの思索の本質に関する忽那先生の深い体験と洞察に由来する唯一無二の果実と存じます。

廣松哲学との出会いに端を発する忽那先生の近現代ドイツ哲学研究のご成果の数々は、千葉大学文学部で担当される「近世近代哲学演習」、「文化哲学」、「現代哲学講読」、「技術論」等々の専門科目にも贅沢にちりばめられております。例えば今年度のシラバスを繙くならば、「社会哲学・政治哲学の分野での批判理論(フランクフルト学派)の代表的論客のひとりであるRainer Forstの論文“Dulden heisst beleidigen”を一文一文丹念に読み進めるなかで論理の進め方を学ぶと同時に、批判理論的な社会哲学・政治哲学の考え方を明らかにする」という「近世近代哲学演習」、あるいは「現代ドイツで注目されている若手哲学者Markus Gabrielの“Warum es die Welt nicht gibt”, (Ullstein 2013)を受講者全員で熟読していくことを通して、哲学にとって文化が何を意味するのかについての考察を深める」ことを目的とする「文化哲学」、そして「戦後日本を代表する哲学者である廣松渉の著者のひとつである『世界の共同主観的存在構造』を丹念に講読し、人間を「共同主観的存在」として捉えるということはどういうことなのかを多面的に明らかにすることで廣松哲学の根底にあるものを理解する」という「現代哲学講読」

等々、廣松哲学と近現代ドイツ哲学最前線を両端に据える忽那先生の研究者としての座標軸は揺るぎなく一層精緻化されており、その諸成果が惜しみなくご講義や演習に投影されていることに後進として深い敬意を覚えます。

千葉大学において断続的に様々な形態で押し寄せる改組に次ぐ改組をはじめ、揺れ動く哲学講座の存続のあり方について、目先の予算獲得や表層的な学問の有用性を巡る雑音に右顧左眄することなく「大学における哲学研究・教育」の本質的原点をお示し下さいます忽那先生の直接・間接のご教示の数々は、後進の一人として大いに心励まされるものでございます。ヨーロッパにおける哲学研究の蓄積と廣松哲学双方に通底する批判精神の行使の意義を、身に染みて痛感いたします。

この拙稿をまとめるにあたり試みました忽那先生へのインタビューの最後に、雑談として「ご定年後は、もしやドイツにお住まいになるのではないのでしょうか？」と質問いたしましたところ、「その可能性も以前検討したが、ドイツの大学宿舎に毎年、長期滞在することを考えている」とのお応えが返ってまいりました。千葉大学の雑務から解放されました暁には、存分に純粹に研究活動に専念される日々が約束されているご様子を伺い、とても嬉しく羨ましくも思います。

忽那先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈りいたしつつ、また今後とも折に触れてはご教示を賜りたく、哲学講座一同、あらためてご指導をお願い申し上げます。

以上。